

ライラさんは将棋アイドルになります 5

「あの……たぶん、私のせいです……」

ほたるが、しょんぼりとしている。

「いやいや、あれはどう考えても……」

初めてのスタジオ。順調にレッスンが進んでいたが、最後に大きなアクシデントが起こった。マイクが壊れたのである。

「すごかった……ですよね」

月子さんが苦笑している。それほど、衝撃的だったのだ。

「ああ、すごい声だった」

恵磨が歌い始めた途端、スタジオが振動した。マイクを通して巨大な音が響き渡ったが、それは一瞬だった。

「あのマイク……高いですよね……」

「うーん」

三東は、あいまいな顔でうなずいた。事務所（隣の部屋）を借り、四人分の給料を払い、マイクの弁償をする。310プロは今、踏ん張りどころであった。

「月子さん、僕は今はじめて、借金の怖さを実感して

いるよ」

「先生もついに……」

そんな話をしているうちに、三人は三東家に到着した。ライラさんと恵磨は、すでに自分の家に帰っている。

「あの……本当にいいんですか？」

「ああ。本当はちゃんと見つけてあげるべきなんだけど」

「そんな……とってもとって、うれしいです……」

三人はいったん三東家に荷物を置くと、今度はそこから事務所へと荷物を運び始めた。毛布、食器、電子レンジ……

「あの、そんなものまで……」

「いいんだよ。事務所としても使わせてもらうんだし」

「そんな、私のほうが……その……」

事務所として借りた隣の部屋だったが、人が住めるようにもなった。そう、ほたるが住むのである。

ほたるは寮で暮らしていたが、寮の持ち主である事務所が倒産。すぐに追い出されることはなかったが、ついに住み続けることができなくなった。

ほたるは、そのことをなかなか言い出せなかった。悩んで悩んで打ち明けた時、三東はあっさり「じゃあ

隣に住みなよ」と言った。

ただ、あくまで事務所は事務所ではたるに貸すのは「ロフト」ということになった。

「私と……一緒ですね」

「え……あ、はい」

「なあ、ライラさん」

「なんでございますか」

事務所（兼はたるの部屋）には、ライラさんと恵磨しかいなかった。三東と月子さんは将棋の仕事、はたるは学校の時間である。

「将棋、楽しいか」

テーブルの上には、盤と駒が置かれている。ライラさんの玉が、詰まされていた。

「うーん、ライラさん、将棋をしながらおしゃべりするの楽しいです」

「おしゃべり？」

「将棋は二人でするものでございますね。だから寂しくないですし、対局も駒を使ったおしゃべりみたいですわねー」

「わかんないけど、楽しいならいいや！」

ライラさんは、詰まされた玉を指で撫でた。

「恵磨殿は、見るからに楽しそうでございますね」

「まあな！ 自分の好きなように動かせるだろ。そういうのがあってんだよ！」

「それは幸せですねー」

「けどよ。やる以上、勝ちたいよなあ！ 道明寺歌鈴に！」

「すごい気合でございますねー」

「巫女でアイドルで将棋だぞお！ ちょっと盛沢山すぎじゃないかなー、なあ！？」

「ライラさんはよくわかりませんです」

「業務提携？」

カフェの一角。三東は、対局中のような厳しい顔つきになっていた。隣では月子さんが、緊張のあまり緊張感のない顔になっていた。

「まあ、そんな堅苦しいことでもなくて。僕たちの会社で、いろいろ提案させていただいて、三東さんの方にはそこに乘っていただくという形で」

「はあ」

「まあ、わが社のアイドル部門に人材派遣していただ

くというか、そんな感じを考えてるわけですよ」

「なるほど」

「まあ、私もですね。世界一周を二度ほどしてましてね。そんな中でやっぱり日本の良さを再確認するといつか。あ、実は子供の頃は結構強かったんですよ。県の大会で代表になったりとか、はっはっは。いや自慢じゃなくてね、人生そういうこともありますよね、私何事も本気なもので」

三東はあくびをこらえた。そして、「僕は残念ながら奨励会に入ったので県大会は出られなくなりましてねー」という皮肉が通じるか、などと想像していた。「社員はみんなそうでね。世界旅行で出会った社員もいて。みんな合わせると世界五周ぐらいかな。はっはっは」

その後もいろいろと話は続いたが、三東も月子さんも、結果的に得たのは「なんか一緒に仕事したいらしい」という情報だけだった。

帰り道。

「先生……どうしますか？」

「うーん……」

弱小事務所にとって、協力者がいることは好ましい。ただ、三東は本能的に感じ取っているものがあつた。

「なんか、生きるのはうまそうだけど、仕事ができる感じがしないんだよなあ」

直観の告げるものと、懐事情。三東の悩みは深い。

がしゃーん。

時間は九時過ぎ。隣の部屋、事務所から物音が聞こえてきた。三東は仕事でいない。

「大丈夫……ですか？」

事務所に入ると、泣きそうな顔をした寝巻のほたるがしゃがみ込んでいた。

「あの、すみません、あの……」

「あ、落ちてきたんですね……」

台所の前に、お椀……と扉が落ちていた。

「その、突然扉が外れて……」

「けがは……なかったですか？」

「あ、はい……慣れてますし……」

ほたるは自分のことを、不運だと思い込んでいる。実際街を歩いているといくつもの植木鉢が落ちてきたり、バナナの皮で滑ったり、目の前でイカ焼きが売り切れたりする。

でも、月子さんは思うのだった。貧乏でないのは幸

運だと。

「明日、……修理しておきます。明日も学校ありますし、寝ましょう……」

「はい……」

二人でとりあえずその場を片付け、ほたるは梯子を上った。布団の中に顔をうずめようとしたほたるだったが、異変に気が付いた。狭い。

「月子さん……」

「わ、私も……不安でした……」

月子さんは、ほたるの手を握った。

「15歳の時……一人で自転車で……来たんです。何もわからなくて、でも、三東先生に救われて……」

「すごい……ですね……」

「泣いている時……手を握ってもらったら……。私、今日はここで寝ますね」

「……はい。ありがとうございます」

ロフトの中に、二つの寝息が響くこととなった。